

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2008年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学	研究科	日本文学	専攻
指導教員	所属・職名			氏名			
	文学部・教授			小嶋 菜温子 印			
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>			個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名		
研究課題名	『源氏物語』における結婚と人物関係の考察—男女における「後見 ^{うしろみ} 」を中心に—						
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年			氏名			
	文学研究科・日本文学専攻 博士課程前期課程2年			石井 宏枝 印			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年			氏名			
研究期間	2008 年度						
研究経費	200 千円						

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、『源氏物語』全体における結婚と人物関係について、「後見（うしろみ）」というキーワードを軸に取り組むことを企図している。「後見」は親子・血縁関係はもとより、結婚関係における繋がりにおいて多く発生する、極めて親密性を求められる関係である反面、政治的利害がからむ関係という一面も持つものであった。貴族が処世して行く上で不可欠な存在であった「後見」の定義をすることにより、当時の社会の様相が浮かび上がってくると考えられる。「後見」は、人と人を繋ぎ合わせ、物語を進展させるものであるという観点に立ち、それが人々の生き様を明らかにする鍵であることを男女の問題を中心に研究を行った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[物語] [後見] [人物関係]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、『源氏物語』の物語世界を「後見(うしろみ)」という糸口から明らかにしようとするものであり、『源氏物語』における主に男女間の人物関係について、「後見」というキーワードを軸に取り組んだものである。

「後見」は、原義的な視点から言えば、経済・政治・社会的な役割、日常的な世話・養育・保護的な役割を担い、それは親・夫・妻・外戚・乳母・保護(者)・養育(者)・庇護(者)・補佐などを意味するものであり、多義性を持つ語である。そしてこれらの役割を担う「後見」は、貴族社会を生きて行く上で不可欠なものであった。また『源氏物語』全体において「後見」の語の用例は、社会的に認められた関係・人物に使用されている点を指摘し、複雑な意味を内包しつつも、それを一言で表すことのできる言葉であり、さらには正式性を付帯させることのできるものでもあるということを示した。

本研究では、出家や死を前にした親が、第三者の男君に娘を託すという(「後見」の委託)(注1)という行為が、登場人物を引き合わせ、『源氏物語』内で新たな物語を紡ぎ出す発端となっているということに注目し、六条御息所が前斎宮を光源氏へ委託、朱雀院が女三の宮を光源氏へ委託、柏木が落葉宮を夕霧へ委託、八の宮が大君・中の君を薫へ委託、という四つのケースを取り上げた。これらは、親(夫)が娘(妻)の後見を第三者の男君へ委託する、というものである。この四例で委託される男君は、光源氏、夕霧、薫である。薫は源氏の実の子でないにしろ、「後見」として託すのに理想的であったかを、その光源氏から子へと続く血と系譜が物語っている。『源氏物語』は、光源氏の母桐壺更衣の「後見」の不在による悲劇から出発する。そして光源氏の、王権へと近づいていく物語の始発点も、「後見」の不在によって臣下に降ろされたところから始まる。さらにまた、前斎宮と女三の宮の二人のケースについて考えるとき、光源氏の栄華への萌芽一始まり一と、准太上天皇という位を極めた光源氏の六条院世界の崩壊一終り一を「後見」の委託に見ることができた。このように考えると、光源氏の一生は「後見」に翻弄され、且つ源氏自身も女君たちを「後見」ることによってその者たちを翻弄・支配しているのである。

少し話しが飛ぶが、先に述べた四例を考察したことから得られた、「後見」と結婚の関係についてここで述べておきたい。次に引く一文は光源氏が、女三の宮の預け先に悩む朱雀院に自らの考えを進言した場面である。傍線を付した部分で、「総じて女君にとっては、さまざまに誠実な後見として世話をしようとするならば、夫婦として契りを交わし、当然の役割としてお守りする世話役がいるのが安心である」と述べている。つまり、後見となるならば、きちんと夫婦となり、正式な役目として「後見」が存在することが良いと言っているわけである。これは「すべて」としていることから、当時の女君全般に当てはまる、一般的な認識であったと言っていよう。

(光源氏)「…すべて女の御ためには、さまざまことの御後見とすべきものは、なほさるべき筋に契りをはし、え避らぬことにはぐくみきこゆる御まもりめはべるなむ、うしろやすかるべきことにはべるを、なほ、強ひて後の世の御疑ひ残るべくは、よろしきに思し選びて、忍びてさるべき御あづかりを定めおかせたまふべきになむはべなる」(若菜上四一四八頁)

先行研究においても、当時の一般的な「後見」のあり方として、それが結婚をも意味していると解するのが妥当だとしていることに加え、本研究で扱った四つのケースを考察した結果、やはり親兄弟以外で「後見」することは、すなわち結婚する(またはそれに準じた関係となる)ことであるという不文律があったと考えるのが自然なのだと思う。これが規定としてあり、各々異なる人物造型やそこに至るまでの状況などによって、それぞれ結婚とは違う結果となるのであり、本研究で扱った男女間の四つの委託は、いわば規定から少々逸脱している例だったと結論づけることができるだろう。言い換えれば『源氏物語』は普通の、(「後見」委託即婚姻関係)、というものを描くことをせず、あえてイレギュラーを描くことにより、女の抱える問題を炙り出そうとしたのではないだろうか。

さて、一人の人物が複数の人物を「後見」しており、また自身も複数の人物から「後見」られていると言う、複数かつ相互に絡み合う状況を「後見」の連鎖と表すが、また、委託

研究成果の概要 つづき

によって別の誰かに「後見」の役目に移ることによっても、それが連なっていくのである。若菜巻に、「御覧ずる世に、ともかくもこの御事定まりたらば、仕うまつりよくなむあるべき」(若菜上四一二九～三〇頁)と、女三の宮の婿選びに際して、乳母が、女三の宮の後見が決まったならば自分たちも安心してお仕えできるとする一文がある。後見を委託することは、その女君に連なる関係(乳母や女房)の人々の生活をも保障するものであり、これも連鎖と言えよう。まさに鎖の輪が幾重にも交差されて、鎖の網のように人々を縛りつけているのである。

また、本研究では「後見」と「ほだし(絆)」の共通性についても考察を試みた。本来、「後見」と「ほだし」の性質は正反対のものであると思われる。「後見」とは安寧をもたらすものであり、「ほだし」の意味するところは自由を束縛するものであり、一言で言うところの心配の種といったものである。この一見相容れない要素をもつ言葉が、死や出家を前にした遺言の中で「後見」の委託と「ほだし」の移譲として儀式的になされるとき、近接的な意味一呪縛性一を持ち、物語を織り成す契機となっていることを述べた。

本論文において、論の展開の中心に据えた「後見」の委託は、結婚の問題と女の生きがたさを浮かびあがらせ、人々の生き様をもあらわにしたと言える。「後見」というものが、親・兄弟・血縁者からのものが第一であることからわかるように、「後見」る者と「後見」られる者は、愛情・信頼が必要とされる、強い結びつきを有している関係である。したがって新たに結ばれる後見関係には、それらを有する関係となることが求められ、それが無い場合には、損得利害関係の契約というような属性を持つことになるのだ。平安前期はシンデレラストoryを象徴するものであった「後見」は、情愛関係といった代償を無言のうちに含むようになってしまい(注2)、さらには女を縛り付けるもの、女の生き難さを暗に象徴するものにもなってしまった。

「後見」という言葉を鍵に『源氏物語』を紐解くとき、そこに「後見」の委託が、新たに人と人とを結びつけるさまを見た。「後見」は登場人物たちを相互、複数に繋ぎ合わせており、その鎖で人々を絡めとる。その「後見」の網から抜け出そうとしても、生きて行く為には、その中に居ざるをえないのである。平安朝貴族が処世して行く上で「後見」は不可欠な存在であり、人生における後見の役割は測り知れない。つまり言い換えれば、後見の存在はその後見対象の人を支配し、縛り付けるものであった。後見は人生を左右、翻弄し、その人の行動や身の振り方、将来の生活まで規制してしまうのである。

『源氏物語』の主要な登場人物は、すべて後見を持つ人物、もしくは後見を失うも、結婚などによって新たな後見を得る人物たちである。後見を持たない人物は貴族社会からの脱落を余儀なくされ、それはすなわち物語の世界に拾われない運命にあることを意味する。つまり、「後見」は人物を物語世界に留めさせ、縫い付ける役目を持っているのである。人と人が交わらなければ物語は進展しないわけであり、その意味で、人と人とを結びつける力を持つ「後見」は、物語を進めさせる原動力、すなわち物語を構成していく役割を担っているとも言えよう。逆に言えば、「後見」がなければ、人々は交わらず、物語も構成され得ない。その意味で、「後見」は物語の本質をも担っているのではないか、という指摘をするに至った。

以上のように考えると、「後見」の網が、物語全体に張り巡らされているようであり、その大きさは計り知れない。今後も「後見」の可能性について考察を続けていきたい。

(注1) 加藤洋介「「後見」攷一源氏物語論のために」『名古屋大学国語国文学』63号、1988年12月

(注2) 室伏信助「源氏物語 第二部一夕霧物語を読む」『國文學』31-13号、1986年11月

※本報告書における『源氏物語』の本文は、小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』一～六を使用した。なお引用に際し、巻名と巻数、頁数を付した。引用文における傍線・強調点等はすべて引用者による。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。